

この「広報ひこね」は48,250部作成し、1部当たりの単価は8円(1円未満切り捨て)です。ただし、原稿作成・編集などにかかる職員の人件費は含まれていません。

連載企画 「わたしの町の戦国 第2回」

織田信長ゆかりの山崎山城

山崎山城が築かれた山崎山は、琵琶湖岸にそびえる荒神山の南東にある小さな独立丘です。山崎山城は、この小丘の山頂の東半分には築かれていました。平地から約50mの高さがあり、眼下には織田信長が岐阜から京都へ登る道として整備した「下街道」を見下ろすことができます。周囲を宇曾川が蛇行しながら穏やかに琵琶湖に注いでおり、はるか北方には彦根山や佐和山を、また南方には安土山や八幡山を望むことができます。



▶発掘調査で明らかになった山崎山城跡

山崎山には、在地の土豪山崎氏が築いた土造りの山城が存在すると考えられてきました。平成4年、この場所に水道タンクの建設が計画されたため、国教育委員会が発掘調査を実施しました。調査の結果、土造りの城と考えてきた山崎山城が、石垣を多用した新しい様式の城(※1)であったことが判明し、これまでの在地の土豪の城のイメージを覆す大発見となりました。

発掘調査では、山の尾根のほぼ中央に、尾根を断ち切るように大きな堀切(※2)が穿たれており、この堀切を境として東側半分を城としていました。その規模は東西約90m、南北約20mありました。堀切のすぐ内側のもっとも高い位置に櫓台が設けられており、見張りのための櫓が築かれていたと考えられます。そして櫓の横を迂回するように城の入口である虎口がありました。

城内には、かつて建物が建っていたと考えられますが、人為的に破壊されたのか上部が大きく崩落しており、ほとんど痕跡が残っていませんでした。ただ、

周囲の石垣は比較的良く残っていました。石垣は、自然石をそのまま、あるいは粗割りして横位置に置き、目地が通るように積み上げていました。検出された石垣は2〜3段ですが、本来は2・5m程度の高さがあったと考えられます。こうした石垣はその特徴が安土城の石垣に類似しており、山崎山城の築城も安土城と同じ天正年間の前半ごろ(1573〜1576)と推定しています。

山崎山城主であった山崎氏に関する資料は、あまり多くありません。代々が六角氏の家臣としてこの土地に住んでいたようですが、上洛をめざして近江に侵攻してきた織田信長の軍門に下ります。

以後、信長の配下で各地を転戦しました。天正10年(1582)4月には、甲州攻めを終えて安土に凱旋する信長を、山崎堅家(賢家)が山崎に茶屋を設けてもてなした記録が残っています。同5月に信長が本能寺で倒れた後、堅家は豊臣秀吉に仕え、摂津国三田(兵庫県三田市)に移りました。

こうして山崎山城は廃城になったと考えられますが、山崎山城が山崎氏の小さな山城であったにもかかわらず、安土城同様に石造りの城に変貌したの

はなぜでしょう。ヒントになるのは山崎山城の位置です。山崎山城は信長が整備した下街道沿いにあり、信長が拠点とした佐和山城と安土城の中間に位置しています。街道の守備に腐心する信長にとって、この位置は重要でした。そこで、守備に合うように山崎氏に山崎山城の大改築を命じたのではないかと考えられます。その際、信長からは改築のためのさまざまな技術的指導がなされ、信長配下の石工集団もそれに関与しました。その結果、石造りの城へと変貌したのではないのでしょうか。それらはもはや山崎氏の居城というよりも、信長による街道守備の拠点と位置付けたほうが良いのかもしれません。

問い合わせ先 国教育委員会  
文化財課 ☎26-50033番、FA  
X 26-50099番

※1土造りの城から石造りの城へ  
「城」は土が成ると書きます。  
中世の城は、土を盛ったり削ったりして仕上げた「土造りの城」でした。城の普請に石垣を多用するようになるのは、一部の例外を除くと、織田信長が築いた安土城が最初でした。

※2堀切 山の尾根を断ち切るように設けられた空堀。

今月の納税 固定資産税(第1期)、軽自動車税(全期) 5月31日(月)までに納めましょう



「広報ひこね」は大豆油インキを包含した植物油インキを使用し、印刷は有害な廃液を排出しない水なし印刷を採用しています。廃棄する場合には古紙回収に出してください。